

令和2年刑（わ）第[REDACTED]号 偽計業務妨害被告事件

被告人 [REDACTED]

## 罪状認否に関する弁護人意見

2020年11月25日

東京地方裁判所 刑事第4部 御中

主任弁護人 平野 敬



頭書事件に関し、起訴状に対する弁護人の意見は以下のとおりである。

### 第1 意見の趣旨

被告人には無罪判決が言い渡されるべきである。

### 第2 意見の理由

#### 1 概要

本件は、被告人が2020年3月17日におこなった2件のツイート（インターネット上のSNSであるツイッターに対する投稿。以下総称して「本件各ツイート」といい、先行するものを「ツイート1」、後行するものを「ツイート2」という。）に関して、[REDACTED]神保町店に対する偽計業務妨害罪が問われている事件である。

被告人が本件各ツイートをおこなった事実自体については、弁護人としてもこれを争うものではない。しかし被告人には偽計業務妨害に関する故意が欠けており、また本件各ツイートは偽計業務妨害の結果を惹起する具体的危険性を欠くものであった。業務妨害の結果を生じたのは異常な因果関係によるものであって、被告人にこれを帰責するのは相当ではない。

よって構成要件を満たさず、罪が成立しない。

## 2 故意が欠けていたこと

偽計業務妨害罪には過失犯処罰規定がないため、その成立には少なくとも未必的な故意を要する。すなわち違法な結果発生に対する認容が必要である。。

被告人がツイート1を投稿した動機は言語学的な諧謔心に基づくものである。ツイート2は当時ツイッター上で流行語となっていた「濃厚接触」の語を冗談めいて用いたにすぎない。いずれにおいても、被害店舗の業務を妨害しよう、あるいは妨害する結果が生じてもかまわないという意思は存在しなかった。

被告人は注意欠陥多動性障害を患っており、思いついたことを衝動的に発言し、あるいは投稿してしまう傾向にある。本件各ツイートも衝動的に投稿されたものにすぎない。被告人において、かかるツイートに起因して違法な結果が発生することに関する認識・認容を見出すことはできない。

被告人は2020年6月から在宅での取調べを受け、当初故意を否認していた。ところが7月29日、故意を否認したことを理由に逮捕された。同月31日、幸いにも勾留請求は却下され、被告人は釈放されたが、いつ何時また逮捕されるかわからないという強い恐怖心を抱くに至った。8月、被告人はかかる捜査機関の執拗かつ強引な取調べに屈して、取調官の命じるままに故意を認める自白調書に署名することになったが、明らかに任意性を欠くものであった。

よって、被告人において故意が認められない。

## 3 ツイートが具体的危険性を欠いていること

### (1) 被害店舗の特定性

本件各ツイートには[redacted]神保町店の名称はいっさい現れない。もっともツイート2に添付された写真にはガラスが映っており、ガラス側面に「[redacted]」のロゴマークが見える。

検察官の主張によれば、このロゴは[redacted]の各店ごとに色

が異なる。写真に映っているガラスのロゴは黒色であり、これは神保町店のものである。よってガラスのロゴから被害店舗が特定できるというものである。

ア 黒いロゴは神保町店だけではない

イ ロゴの色の違いは一般に認識されていない

(2) 本件各ツイートは冗談として閲覧者に受容されていること

ツイッターの閲覧者は何十人から何百人、ときには何万人もの投稿者のツイートを時刻順に閲覧しているから（いわゆるタイムライン）、投稿時刻の離れた複数のツイートはそれぞれ単体で解釈されるのが通常である。投稿者が複数のツイートを明示的に関連付ける投稿方法も存在するが、本件においてかかる方法は採用されていない。

た当時のツイッターにおける状況に照らしても、冗談であることが明白だったからである。本件各ツイートを関連付けて「あたかも感染症にり患した者が同店で飲食をしているかのような虚偽の事実」を読み取った者はいない。すなわち、本件各ツイートは、被害店舗に対する業務妨害の具体的危険性を伴うものではなかった。

本件が騒動となり、被害店舗が消毒等の行動を迫られたのは、氏名不詳の何者か1名が [REDACTED] のウェブサイトを通じて通報したことが直接の原因である。かかる通報がなければ、本件各ツイートは単なる冗談として人目を引かないまま埋もれていった。すなわち本件各ツイートから被害店舗における被害発生までの間には予見しがたい第三者の行動が介在しており、異常な因果関係をたどったものというべきである。

#### 4 結論

以上により、被告人には罪が成立しない。

以上